

渋沢敬三と日本の近代

—越境し総合する知の100年

日時： 2012年12月4日（土）13:30～18:30 オンライン開催

【プログラム】

第1部 渋沢敬三と日本常民文化研究所の100年（13:30—14:40）

開演 13:30 司会進行 関口博巨（日本常民文化研究所）

13:30～13:35 挨拶 安室 知（日本常民文化研究所所長）

13:35～13:45 趣旨説明 丸山 泰明（日本常民文化研究所）

13:45～14:00 **100周年に寄せる言葉** お手紙代読 安室 知
渋沢 雅英（公益財団法人渋沢栄一記念財団相談役）

14:00～14:40 基調講演

アチック学派の‘知脈’ 形成と‘常民文化’ 概念の誕生 —人類学史の観点から—
全京秀（ベトナム デュイ・タン大学外国語学部長・日本常民文化研究所客員研究員）

14:40～14:50 〈休憩〉10分

第2部 人間渋沢敬三に迫る（14:50—16:50）

14:50～15:20 永井美穂（渋沢史料館）

渋沢敬三と祖父栄一 —生い立ちからみえてくるもの—

15:20～15:50 丸山泰明（日本常民文化研究所）

ヨーロッパと南島の経験 —他者へのまなざしと自己への内省—

15:50～16:20 辻本侑生（放送大学大学院）

渋沢敬三と銀行調査部 —民間企業における「調査」の系譜—

16:20～16:50 佐藤健二（東京大学）

渋沢敬三における「学問」と「実業」

16:50～17:00 〈休憩〉10分

第3部 渋沢敬三から何を受け継ぎ、どのように受け渡すのか（17:00—18:30）

17:00～17:20 コメント 安室 知（日本常民文化研究所）

17:10～17:20 コメント 後田多 敦（日本常民文化研究所）

17:20～18:20 ディスカッション 司会 丸山泰明（日本常民文化研究所）

18:20～18:30 閉会

神奈川大学日本常民文化研究所は2021年に創設から100周年を迎えた。はじめは、大学生だった渋沢敬三が友人たちとつくったアチックミュージアムソサエティである。渋沢の自邸の屋根裏に設けられた博物館からはじまった研究活動は、今日、国内外の研究者と共同研究を行い、大学教育を行うまで成長した。そこで100周年をきっかけとして、研究所の根本を確認するために、渋沢敬三とはいかなる人物だったのかを改めて問い直したい。渋沢敬三は、普通の人々、すなわち常民の生活を研究した学者であるとともに、日本銀行総裁や大蔵大臣などの政府の要職を務めた実業家でもある。誰とでも分けへだてなく平等に向き合い、学界と財界をまたいで活動し、民俗学や民族学・歴史学を越境し総合した知と人格は、いかなる思想と経験によって形成されたのだろうか。そして、学問と経済を通じて渋沢敬三が実現しようとしたものは何だったのだろうか。渋沢敬三という人物を生み出した日本の近代、そして渋沢敬三が生きた日本の近代を検討することを通じて、これまでの100年をさらに次の100年へとつなげていく礎とする。



渋沢敬三
新潟県湯之谷村にて (1936年)

講師紹介

- ◆ 全京秀 (ベトナム デュイ・タン大学外国語学部長 日本常民文化研究所客員研究員)
1949年 韓国ソウル生まれ 生態人類学
「渋沢敬三の「全体」と「自民俗誌」—アチック学派の提言」『歴史と民俗』37(平凡社 2021)
『韓国人類学の百年』(風響社 2004)
- ◆ 永井 美穂 (渋沢史料館学芸員)
1972年 岐阜県生まれ 民俗学
「渋沢栄一と帽子」『渋沢史料館年報』2016年度(渋沢栄一記念財団渋沢史料館 2018)
「花祭 東京三田綱町邸」『甦る民俗映像 DVD ブック—渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』(岩波書店 2016)
- ◆ 丸山 泰明 (日本常民文化研究所所員)
1975年 新潟県生まれ 民俗学
『モノと図像から探る 怪異・妖怪の東西』(共著 勉誠出版 2017)
『渋沢敬三と今和次郎 —博物館的想像力の近代』(青弓社 2013)
- ◆ 辻本 侑生 (放送大学大学院)
1992年 神奈川県生まれ 民俗学・歴史地理学
「いかにして「男性同性愛」は「当たり前」でなくなったのか —近現代鹿児島事例分析」『現代民俗学研究』12(現代民俗学会 2020)
『津波のあいだ、生きられた村』(共著 鹿島出版会 2019)
- ◆ 佐藤 健二 (東京大学副学長・大学院人文社会系研究科教授)
1957年 群馬県生まれ 社会学
『真木悠介の誕生 —人間解放の比較= 歴史社会学』(弘文堂 2020)
『文化資源学講義』(東京大学出版会 2018)

オンライン参加についてのお願い

【ミーティングアプリ「Zoom」のご利用について】

お手持ちのスマートフォン・タブレット・カメラ付きPC等で「Zoom Cloud Meetings」アプリのインストールをお願いいたします。Zoomは無料でダウンロードできます。
また、事前に必ずZoomの動作確認をしていただいた上で、ご参加ください。

【Zoom アプリでの参加方法】

- ① ミーティングに参加後、画面右上の「表示」をクリックし、スピーカービューに切り替えをお願いいたします。
- ② ミーティングに参加後「コンピュータでオーディオに参加」をクリックしてください。
- ③ マイクをミュートし、マイクのマークに斜線が入っていることをご確認ください。
- ④ 回線状況により音ズレや遅延が発生する場合がございます。通信の良好な場所での視聴をおすすめいたします。開始時刻になるとつながります。

◇ 表示名の変更方法（お申込み時のお名前にしてください）

- ① カーソルを下に動かし「参加者」をクリック
- ② 画面右、一番上にある「表示名(自分)」の「詳細」をクリック
- ③ ③「名前の変更」をクリック、表示名を入力し「OK」

◇ スピーカービューへの切り替え

画面右上にある「ギャラリービュー」をクリックし「スピーカービュー」に切り替える

◇ ご質問について

チャット機能より送信してください。

- ① 宛先 「共同ホスト」
- ② ご自身のお名前（表示名）・どなた宛・内容（簡潔に）

【その他ご案内】

今後の運営にあたり参考にさせていただきたく、終了後のアンケートにご協力ください。
回答方法は終了後にご案内いたします。※所要時間は約5分です。

アンケート QR コード（終了後に回答できます）



ご協力をお願いいたします。

緒言：偏見と誤解

私はこれまで半世紀以上、人類学を勉強してきて、少なからぬ人類学史関連の書籍を読んだ。共通する現象としては、例外なく西欧中心の叙述だったということである。1998年12月の暮れに大阪の国立民族学博物館で人類学史に関するシンポジウムが開かれ、ゲストスピーカーとしてシカゴ大学人類学科のジョージ・ストックキング (George W. Stocking, 1928-2013) 教授が、小説家の夫人と共に参加した。学会終了後、夕方に小さな席で一献を交わす機会が持たれた。彼は歴史学者として「人類学史」を専攻した人であり、4000ページに及ぶ人類学史関連の書籍を8巻のシリーズで発刊した。いわば、彼の専攻は世界人類学史なのである。私は彼の著書を全て読んだので、彼と向き合っただけで、次のような質問をした。「あなたの著書の中には『東アジア人類学』『中国人類学』『日本人類学』等の単語を見出すことはできなかったが、なぜなのか」。彼は即座に答えた。「ああ、考えたこともなかった問題だね」と。続けて、彼は私の表情を見て「申し訳ない」と言った。私はストックキングの即答を聞いて、本当に茫然自失した。私が期待したのは「自分はアジアのことをよく知らないし、アジア方面の言語に疎いから」という程度の答えであった。そのため、彼の即答は一種の差別に感じられた。彼の反応を改めて整理してみるならば、「ああ、東アジアにも人類学というものがあったのか」という意味にとらえられ、彼も私の反応に対して真剣に感じ入った結果、「申し訳ない」という言葉を続けたのだ。人類学という学問が西洋から出発し、主導してきたことは事実だが、その後も続く西洋の植民主義的膨脹によって、東洋においても人類学という学問が進められてきたことは明白である。100年をゆうに越える人類学史の記録を持っている日本に対して、このように無関心な世界人類学界の現象を見過すことはできないという考えをとどめることは出来なかった。その後、私は日本と中国において進めてこられた人類学的作業に関心を集めるようになった。

英語が主軸言語として支配している学界の現実を十分に勘案したとしても、これほどまでに甚だしいのであれば、根本的に考え直す必要がある。人類学という学問を洋の東西を分けて考えるとすれば、片側だけで推し進めてきた結果のみが認識されている現実を無視することはできない。英語圏で成立した業績のみを人類学史として扱ってきたことについて不満を持ち、ドイツ語とロシア語によって作られた人類学的業績を中心に整理したバーミュールンによる新しい書籍が誕生し、それまで英語のみによって作られた人類学史書籍に小さなからぬ抜け穴が生じたりもした (Vermeulen 2015)。西欧以外の人類的業績に関しては、もとより関心外という世界観を持っている人類学史専攻者のせいばかりにしている場合ではない。バーミュールンが試みたように、英語以外の言語によって築き上げられた人類学史の業績が本格的に注目される機会を待つだけでは足りない。私が今議論しているレベルに限って述べるのが許されるならば、言語は手段だといえる。手段の支配によって、存在するものを、しないように見なすような現象は容認されてはならない。英語を駆使する人々が自ら必要性を感じて我々を訪ねてきた時に、彼らが読むことができる資料は最低限整理されているべきだというのが私の持論だ。そのような経緯から、私は日本人類学史に関心を持って資料を整理するなかで、アチック・ミューゼウム (脚注1 以下、アチックと表記) と日本常民文化研究所 (以下、常民研と表記) の業績に出会った。既に100年の歴史を持つ研究結果に対し、私は「アチック学派」という用語を作った。学問をする過程には、常に文献の参照がついてまわるはずだ。人類学という学問をするのであれば、この分野の作業について主流をなしてきた業績に、常に鋭敏に反応することが「学之常情」である。言い換えれば、私が今行っている作業が、文献検討との対比を通じていかなる座標と水準にあるものなのか、または、いかなる寄与が可能かということについて考えるはずだ。日本民俗学 (私は民俗学という学問は、広い意味で人類学の一分野だと考えている) とて、例外ではない。例外であることを主張するならば、自ら進んで孤立無援の将軍になることを望むことに

なり、普遍的な学問の一種としての扱いを受けることができなくなることになる。本稿で、日本の民俗学的／人類学的作業を主題とし、「人類学史の観点から」という副題を付けたのには理由がある。本稿には、西欧の主流学界において成し遂げてきた作業を参照にして、日本の場合を部分的ではあるが、整理してみるという意図が含まれている。

本稿ではアチック学派と渋沢敬三（以下、敬三と表記）を、学史の立場から注目することにおいて、「民俗学的」というよりは「民族学的」な側面を浮き彫りにしようと考えている。私は、敬三を民俗学という枠にあてはめようとする考え方を警戒している。はたして、敬三が追求しようとした学問的志向が民俗学という枠組みにあてはまるだろうかという疑問がある。敬三の学問的志向はむしろ民族学（または、人類学）であると考えている。しかし、敬三がそれを推し進めようとしていた当時、日本において支配的であった学問的傾向の一つが柳田國男（以下、柳田と表記）の主導した日本民俗学であったことは動かぬ事実である。敬三の志向が、柳田式と内容の上で最も近い関係に置かれていたと説明することで、誤認を最小限に減らすことができるだろう。論理学上では、「似ている」ということは本質的な「違い」を意味する。したがって、柳田式と敬三式が「似ている」ということは、両者は本質的に「違う」という論理を要求する。現在の日本民俗学界に対しては非常に挑戦的で、失礼にあたる提案かもしれないが、敬三が追求した学問と柳田のそれが、見た目では類似する面が多くあったとしても、本質的には異なる志向性から出発していると認識することが望ましい。すなわち、柳田と敬三の差異を、程度というよりは本質的な次元で検討してみたいというのが筆者の立場でもある。柳田が「民間伝承」(popular tradition)を基本的な枠として備え、自身の立場を強化するためにドイツ式の volkskunde を参照しているのとは異なり、敬三は出発点において本質的に 19 世紀末から 20 世紀初めの ethnology (ethnologie=volkerkunde) を参照している点を確認しておく必要がある。この部分について明確な交通整理を行わなければ、私たちは不要で消耗的な論争に巻き込まれがちになる。実際に不要な懸念と議論が散在しており、現在も進行中だという点を指摘したい。したがって、私はアチック学派と敬三の業績を「民俗学」または「日本民俗学」という枠内で理解しようとする試みは、ある程度偏見にとらわれた思考の結果だと考える。アチック学派を正しく理解するためには、以上のような少なくとも二つの偏見を克服しなければ、出発点から誤った構図を設定する危険性に陥る。ストックキングの例が示しているような西洋学界からの偏見と、日本学界内部からの偏見が、同時に重複的に作動する状況下において、アチック学派と敬三への理解は必然的に五里霧中に陥るほかはない。このような観点は筆者の信念であるので、本論では具体的に別途の議論をしない点について、あらかじめ了解を得たい。

創党百周年を迎えた中国共産党は、これまでの半世紀間に推し進めてきた資本主義的市場経済の秩序の改編を試みることによって、中国共産党中心の体制強化のための路線を公然と推進し始めた。一種の中国共産党再発明プロジェクトを始動したようである。その影響は資本主義支配的な世界市場の秩序を根本的に揺さぶる可能性がある。このプロジェクトの成否、または成功の程度に関する予測的質問をする前に、そのような再発明の企画の試みについて注目をしたい。中国共産党百年の蓄積された歴史を踏み台にして、新たな未来志向的発想によって跳躍しようとする実践的意志と試みに対して注目するのである。筆者は百年の歴史を持つアチック学派の業績を、できるだけ敬三とアチック学派の立場から理解したいと考えている。そのためには、アチック学派の「知脈」形成とその作業を主導した敬三の千方百計（脚注 2）と、施行錯誤の過程を綿密に把握することによって、アチック学派が追求した方法論が民俗誌的写実主義 (ethnographic realism) に基づいているという点を確認しようと思う。敬三が大東亜戦争初期に天佑神助で核心的な概念として選択したのが「常民文化」であった点に着目し、本論では「常民文化」の人類学的な意味と、それが大東亜戦争のうちに出現する思想的で政治軍事的な背景について出来る限り明らかにすることにする。「常民文化」は敬三の学問の全てがそっくり込められた、極めて人類学的な概念だと考える。人生では常に、危機にあるときに鋭い洞察力が発祥するものである。「常民文化」は大東亜戦争という危機にあった学界に、敬三が投げかけた鋭い洞察力であった。本稿で柳田の「常民」に関して紙面を割愛して議論するのは、二つの理由がある。一つは柳田が提起した「常民」という用語に関する議論は既に多く行われてきたからであり、もう一つは、柳田に対する学界の評価の中

で、敬三と重なる部分についての誤解が、敬三を理解するうえで妨害要因になっているからである。私はこの機会に、二人の学問的志向と思想的差別性を明確に整理するという目的を持っている。本稿を整理する過程において、「常民」に関する議論に充満している日本の学界が、「常民文化」に対しては異常なほど無関心な状態であることを発見した。事実、両者はパラダイム上の差を見せているという点も確認することができた。人類学的に考えるならば、「常民」に関する議論から「常民文化」に議論が広がるのが学問の発展につながるといえる。「常民文化」についての議論は、自然に人類学的視線を要求することになるだろう。最後にアチック学派の百年の決算において核心的概念である「常民文化」を再発明することが、日本人類学界の重大な任務だという点を力説しようと思う。「常民文化」は次の百年のための踏み石の役割をすることになり、それは日本だけでなく東アジアにおける人類学という学問の希望的な未来を確認する契機をもたらしてくれるといえる。アチックを母体とする常民研が属している神奈川大学は、横浜の市内中心部に新しい「みなとみらいキャンパス」を設け、国際文化学部の中に歴史民俗学科を設置して未来を担う新しい人材の育成を始めた。常民研はアチック百年の歴史を背景に、二世紀目に突入した時点を、祝いと期待の視線によって迎えることになる。新しく設立された歴史民俗学科の出発と、アチック学派百年の蓄積が結びついてシナジー効果を生み出すことができる「常民文化」再発明の方案を議論する理由は、このような状況の変化から始まっていることがわかる。

結論：常民文化の再発明

百年という歳月の間蓄積されたエネルギーとして、アチック学派の業績に出会うことができるだけでも、東アジアで人類学を勉強している私は、学び甲斐と幸福感を感じることができる。しかし、1956年にビアズリー (Beardsley) が懸念していたように、近年に至るまでアチック学派の業績はほとんど「眠りについた」状態に置きざりにされてきたことは否めない。アチック・ミュージアム彙報とアチック・ミュージアムノートを中心に、博物館の遺物と図書館の文庫などを含むアチック学派の業績は、総合的かつ体系的に分析されるのを待っている。そのような作業を主導する具体的な組織が結成されて、精密な作業計画書が作られることを希望するところだ。アチックの方法論からは下のような期待が可能である。

敬三にとってのキーワードは「常民」でなく「常民文化」であった。柳田の「常民」と敬三の「常民文化」のギャップを軽視する傾向について私は同意できないため、そのような傾向に対しては、批判的立場を守るよりほかはない。両者間の哲学的な土台と、思想的志向、そして追求してきた方法論は、共有できる部分よりも共有できない部分がはるかに大きい。常民文化は本質的に「ethnography」を土台にした人類学的な文化概念と連動しているという点を強調したい。文化概念は最も普遍的な人間現象を志向している。ところが、敬三による常民文化の概念が出現した頃は、大東亜戦争によって最も非常事態の時、すなわち特殊な時期であった。最も普遍的な概念である文化が、最も特殊な時期に登場することになった現象を、論理的にどのように説明することができるだろうか。この最も特殊な時期に最も多用された「国民」という概念ではなく、「常民」を文化に接合させた敬三の志向性について、どのように説明することができるだろうか。この過程を私は二つの段階から説明しようと思う。一つは人類学的な文化の概念を「常民」に接合させることで、学問の志向性を明らかに人類学に設定しようとする意志の表われだったといえる。もう一つは、概念上の普遍と特殊の問題だ。特殊な時期に登場した、普遍的な概念としての文化が持つ属性について考える必要がある。

レヴィ＝ストロース (Levi-Strauss) の二項対立 (binary opposition) の概念によれば、普遍と特殊は一对である。したがって、特殊は普遍を排斥することができず、普遍は特殊を排斥することができない。両者は互いに反対の立場だが、互いを内包しているのだ。したがって大東亜戦争という特殊な時期に選択した普遍的な概念としての文化は、特殊な時間上の状況論理を越えるものである。したがって、普遍的な概念である文化が特殊な用語である「常民」を包容するほかはない状況を展開したのだ。敬三がこのような論理を計算して「常民文化」の用語を提案したのか否かは分からない。問題は「常民文化」のなかに含まれる胎生的な非常性についての意識だ。今まで、この問題は誰も提起してこなかった。極めて「普通」でなければならぬ「常民文化」が非常の状態で生まれたまま、この80年間放置されてきたのだといえる。今、アチック百年の時点で敬三が

提案した最も核心的な用語である「常民文化」の概念を熟考し、それを再発明する作業が必要だといえる。その再発明の過程は、非常時に生まれた「常民文化」の「常化」だと考える。「常民の常民による常民のための」常民文化を明らかに認識することがアチック学派の哲学を強固にするということであり、このような常民文化を再発明することが今後百年のための課題だといえる。現在よく口語体で使われている「常民研」（日本常民文化研究所の略称）という単語を、敬三が生前に使ったかどうかはわからない。もし「常民研」の「常民」が「常民文化」の正確な意味を内包しておらず、「常民」だけを代弁するならば、日常的呼称と指称で使っている「常民研」という略称の意味から再考することが、再発明の第一歩になると考える。

マーカスとクッシュマン（Marcus & Cushman）は多様なジャンルの文学からインスピレーションを受け、民俗誌的写実主義の多様性について言及しているにも関わらず、テキストとしての歴史的記録という厳然な事実については言及さえしなかった。私の質問に対するストックキングの即答からも感じた問題だが、人類学はまだ、あまりにも当然に西欧にだけ存在し、文字の無い社会のみを対象にして行動し、考えてきた認識論のなかに安住している。21世紀の世相において、文字が使われない地域は極めて珍しい。文字を使うことが極めて日常的な世の中である。今、私たちは西欧で生み出され、発展してきた人類学という学問の本質的な盲点を指摘しなければならない。エリック・ウルフ（Eric Wolf）が告発的に提示した著書「ヨーロッパと歴史の無い人々」（Europe and People without History, Wolf 1982）における、文字の無い「未開社会」から始まった人類学の胎生的限界が西欧の人類学であるという指摘に私は共感する。しかしウルフの告発的な指摘は、代案を提示できていない。文字社会の人類学というジャンルは窮極的に、文字社会がその役割を担当しなければならないというほかはない。文字社会の人類学が歴史学と共に呼吸しなければならない宿命にあることはあまりにも明白であり、民俗誌的写実主義に立って積極的に実践しなければならない文字社会の人類学という課題が「常民文化」の再発明の機会であり、天命だと考える。民俗誌は進化している。常民文化を基盤とした民俗誌が進められなければならないのは明らかだ。「常民の常民による常民のための」常民文化の民俗誌を創り出す作業が、次世代の人類学者を待っている。敬三が提示した「常民文化」概念の再発明を通じて、民俗誌的写実主義の安着と民俗誌が進化していく名分と実利を担保することができる。「民俗誌的権威の創出のための住民観念の文化的解釈（exergesis）」（Marcus & Cushman 1982. 1. :36）が並行して成り立つならば、談話論理の水準に安住している日本人論と日本文化論に対しても、新しい地平を開いてくれることが期待される。

日本という社会の特性が本質的に資料に反映されているという点を再認識する過程が必要だ。文字社会は、例にもれず歴史的資料を史料という名で流伝させていることが特性であるが、史学において好まれる史料以外に、一般人が生活の中で生み出し、伝承してきた記録物が指摘され、注目されなければならない。文字社会の特性を常民文化の再発明のために必要な常数として受け入れることによって、日本的な民俗誌についての認識が世界の人類学界に認識されるようにする作業が必要である。常民文化の再発明が日本国内の学界のための声に終わらず、世界人類学界に認められ、また認められなければならない人類学の問題だという点を納得させる作業にならなければならない。「米英鬼畜」の敵性言語が排撃された時期に研究所の看板も英語から日本語に取り替えて掲げられたが、所員の業績を英語によって出版した敬三の意図と意志は、世界学界に向けた学問的疎通の実践、それ以上でもそれ以下でもなかったのだ。大東亜戦争という厳重な時代的重圧感の下で、学問を至上課題とした敬三の思想と意志と執念が読みとれ、アチック学派の基本精神が志向するところを証言するような場面である。1933年に「日本人の手から世界の学界に最初に発表してほしい」と言明した自身の希望を、12年を過ぎて実践することになったという実証行為だったのだ。柳田をはじめとする学界構成員の大多数が戦争に協力的な言動を実践しているなか、敬三の学問的实践は少なくとも別の方向に向かっていたことは明らかである。一方で、帝国主義日本、特に帝国の戦争状況下で学問の自由を実践するということが、どれほど難しい時空間的条件だったのかを実感することができるようなエピソードでもある。

1934年5月頃、言論は敬三を「アマチュア民俗学者」と認識し、1937年頃、ある財閥研究者は敬三に対し以下のように批評した。「彼には土俗学研究といふ趣味もあつて、時々山間僻村に入つて土俗の研究をやつてゐる。そのために農村問題などにも関心を持ち、都市、農村の対立関係等から現代資本主義の欠陥や矛盾につい

ても充分の認識を持っているさうだ」(西野入愛一 1937. 8. 5: 164) 玩具収集の趣味から出発して成長した彼の学問的志向性はアチックの学問的業績の蓄積と共に徐々に専門的な学者の領域に達していた。「常民文化研究のオルガナイザー・渋沢敬三: 学者として人間として、民俗学研究の組織者、素人の学者として」(池田弥三郎、宮本常一、和歌森太郎共編、1965) というタイトルが敬三に付与された。編者たちは柳田國男、折口信夫、渋沢敬三、南方熊楠の四人を「民俗学の先達たち」に選定し、敬三に「オルガナイザー」と「組織者」という修飾語をつけ、同時に「素人の学者」とも評した。敬三の専門領域が、経済分野の銀行業であったことは否定できない。筆者は彼らの判断に部分的に同意しつつ、同時に敬三にとって学問は第二の専門領域だったと規定したい。一人に一つだけの専門領域を配分するのは一種の固定観念だ。換言すれば、敬三には二つの専門領域が存在したということ、少なくない数の文献から、また直接的または間接的文献によって確認することができた。日本における「常民文化研究」と「民俗学研究」は敬三という組織者がいなければ、現在のような姿ではあり得なかったといえる。大学という公的機関が学問の組織化と運営を進めた時期に、民俗学分野は「野」の学問に位置していたという事実がある。戦後、民俗学が大学に席を置いて学問本領に属するようになった過程を考えれば、敬三の組織力とその意味について再び熟慮することになる。彼の組織力は民俗学を部分によって構成する総合的な観点から出発しているという事実を本稿で実証した。本稿の結論を一言で整理すれば次のとおりだ。敬三が常民と共に構築した学術組織がアチックであり、この組織は同人制で運営され、アチックの成果は敬三が創案した常民文化の概念によって収束される。すなわち銀行家である敬三がいなければ、アチック(常民研)は存在することができず、同時にアチックを構成した常民がなかったとすれば、学問上の敬三も存在し得なかった。敬三が組織した活動の中には、体質人類学を含む人類学的な作業があったことはもちろんだ。1930年代の人類学的学問活動において、文化人類学と体質人類学が共にフィールドワークを実施して研究を推進したところは、外地の二つの帝国大学しかなかった。台湾の台北帝大に属していた土俗・人種学研究室と、朝鮮の京城帝大にあった宗教及社会学研究室の二か所では、体質人類学的な作業または、体質人類学分野の専門家たちと一緒に共同作業をした記録がよく残っている。戦前の一定の時期に帝国日本の国内で人類学的な作業をした組織は東京帝大とアチックを含む四か所だったということが可能だ。出版されたアチックの業績には含まれていないが、敬三の学問的活動の中には体質人類学と考古学だけでなく、自然科学が含まれていることについて新たに光を当てる必要がある。人文学と社会科学、そして自然科学を合わせた彼の総合的な学術調査の試みと経歴を無視することはできない。このような観点はアチックの例会と野研活動によってより一層鮮明に浮び上がる。人類学という側面から観察するならば、敬三とアチックの関係は少なくともコインの両面だと認識するのが妥当だ。同時に敬三の学問活動の足跡はアチックの過去領域を越えていることも示している。広義の人類学が志向している統合科学の未来は、敬三の指導力を待望しているようである。

筆者は本稿を終えて、あえて一つの提案を付け加えようと思う。敬三が設立し、成長させたアチック学派は、世界的に類を見ない学術的な組織であったことが明らかになった。この組織の特徴も鮮明に表れた。日本式の学問組織の特殊性と共に、独創性も発見された。西欧から輸入された学問を自らの試行錯誤を通じて体得した方法論は本当に価値の高いものである。アチックの独創性があるので、「日本文化人類学＝学問第三世界」というしがらみを抜け出すことができるだけでなく、今後百年の再発明の機会が可能になるのである。アチックを基盤とした学術博物館が設立されるならば、これもまた、世界最初であり唯一の博物館になるだけでなく、常民研が今後百年を指向していくことができる強固な受け台の役割を担うことができると考える。「アチック・ミュージアム博物館」(Museum of Attic Museum)の設立を提案する所存である。

今回は、渋沢敬三と祖父の渋沢栄一との関わりについて、家族・親族の影響に注目し、主に河岡武春、土屋喬雄、渋沢雅英、宮本常一ら、渋沢敬三と直接かかわりのあった研究者らによる考察を踏まえながら再考を試みる。なお、敬三が動物学者を志した過程とその後の進路については、別稿に譲る。

敬三の祖父である渋沢栄一は、多くの会社や団体を設立、育成し、日本の近代経済社会の基盤を築いた実業家である。近年特に、新一万円券(2024年発行予定)の肖像やNHKの大河ドラマの主人公に選ばれるなどクローズアップされている。藍玉の商売を手掛ける農家に生まれた栄一は、幕末の動乱期に尊王攘夷運動に傾倒、その後一橋慶喜の家臣となった。幕臣として渡欧している間に維新を迎えて帰国し、静岡で活動。そして明治政府の官僚となって様々な制度策定を行い、退官後は第一国立銀行(のちに第一銀行)を拠点として道徳に基づく商業振興を提唱実践し、近代的で豊かな社会を目指した。

敬三の父篤二は、敬三誕生の翌年から澁澤倉庫部部長に就任して父栄一の指導を受けながら家業に励み、栄一が関係する会社の重役を務めるも、写真や義太夫、狩猟などをよくする趣味人であった。性格円満で親切、世話好きで、子どもたちにとっての遊びのリーダーでもあった。近所の子どもたちを集め、腕白倶楽部を結成したのも篤二である。当時篤二は竜門社(現在の公益財団法人渋沢栄一記念財団)社長を務めており、敬三もその様子を知っていたのであろう。同志が集い、雑誌で意見を発表するという「遊び」「学び」を通して、敬三は連帯する楽しさと達成感を体験した。

栄一長女の歌子と夫の法学者・穂積陳重は、敬三に大きな影響を与えた。穂積夫妻は、二女の琴子と夫の大蔵官僚・阪谷芳郎とともに、常に弟篤二とその家族に対して心を配り見守るが、やがて篤二は家を離れ廃嫡となる。栄一を取り巻く親族による混乱に対する中で、周囲の人の感情を敏感に受け取る敬三の情動的な能力は、大人びた言動や先回りした配慮として表れた。篤二の廃嫡後、妻の敦子は3人の息子を連れて小さな貸家を転々とし、敬三は心細さを抱きつつも、子どもながらに母を思い悩んだ。

栄一もまた、篤二のいない一家を心配して週1回論語講義のために敬三らのもとを訪れた。敬三は祖父から贈られた『ポケット論語』を手に出席し、のちにその会は飛鳥山に漢学者の宇野哲人を招いての「論語会」に発展した。

動物学者になりたかった敬三ではあったが、敬三を実業界に進ませたい栄一の懇請に対する半年以上の持久戦の末、受け入れて希望の進路をあきらめた。第二高等学校在学中であった敬三が、『徳川慶喜公伝』のために栄一が書いた「自序」を朗読し、「衷心感激」し落涙したことは栄一の心を動かし、敬三もまた、祖父の人生とその思いを知る中で、敬愛を深めた。

栄一に対する敬三の態度として、客観的視点がある。身内であることによる謙虚さと学問的視点に基づく価値観が、栄一を伝える手段として、伝記制作ではなく資料集の編纂を選択させた。

敬三にとって祖父栄一は、敬愛する身内であり、後年、他者がそれぞれの視点で語ることができる歴史的人物でもあったといえるだろう。

渋沢敬三は 20 代の後半、大学卒業後に入行した横浜正金銀行のロンドン支店に駐在するために 1922 年 9 月から約 3 年にわたり渡欧し、イギリス滞在中はヨーロッパ各地に旅行している。また、帰国後の 1926 年 5 月には、農商務省の官僚として台湾米穀大会に出席する石黒忠篤に随伴して台湾に行き、帰りは石黒と 2 人で琉球諸島を見て回る旅を行なっている。これらのヨーロッパと南島をめぐる二つの旅について、学者や実業家として実績を積み重ねた後世の姿から遡るのではなく、結婚したばかりの渋沢家の当主である 20 代の若者がこれからの生き方を模索する中で、「他者」と「自己」をどのように捉えたのかを考えたい。

同時代の時代状況をからずれば、ヨーロッパそして南島と日本の関係は、「世界を分割して統治する先進的なヨーロッパ」と「遅れてきた帝国としての日本」であり、また、「アジアの帝国としての日本」と「開発や資源獲得の対象としての南島」である。だが渋沢は、このような構図にとらわれない視点で旅をしている。

渋沢はイギリスでは銀行業務に従事しながら、休暇を得てはイタリア、フランス、スウェーデンなどのヨーロッパ各国に旅行している。ロンドンでは大英博物館やウィリアム&アルバート美術館、ロンドン動物園に通い、旅先でもミュージアムを頻繁に訪ねている。特に西洋芸術に傾倒し、クラシック音楽のコンサートやオペラなども熱心に鑑賞し、ハイカルチャーに親しんだ。他方で社会主義に接し、貧困や労働者のストライキにも関心を寄せている。渋沢はヨーロッパの人々の上層から下層まで非常に幅広く観察して考察している。そして、ヨーロッパの社会や生活・芸術に触れながら、日本を遅れた存在として卑下するのではなく、また逆にナショナリズムを発露させて日本を称揚するのでもなく、日本とヨーロッパを相対的に捉える視点を獲得していった。

では南島への旅はどうだろうか。台湾の旅は、石黒をはじめとする官僚とともに行く統治者の側としての視察であった。しかしながら、渋沢は植民地化による在来地名の変更や民政的な調査研究を欠いたダム開発、日本の歴史や日本語を詰め込む教育といった統治のあり方を批判的な視点から書き記している。また、西表島では炭鉱労働者が搾取される姿に心を痛めている。日本の周縁部から、日本のあり方を批判的に問い返すまなざしを向けていた。

南島の旅から戻った後、渋沢は祖父栄一が設立した第一銀行の取締役となり、若き実業家として活躍していく。そして、台湾で抱いた、国民の手によって世界人類に貢献する博物館を設立する決意を実現するために、アチックミュージアムにおいて研究活動を本格的に行なっていたのである。

本発表は、銀行をはじめとする民間企業における「調査」の系譜と、渋沢敬三の関わりについて検討し、今後の研究や実践における可能性を探るものである。これまでの研究では、戦前期の公的社会調査と、同時期に勃興した社会学／民俗学との密接な関係性が明らかになってきた。しかし、民間企業等を含む広義の「調査」実践については、その系譜がほとんど検討されていない。そこで本発表では、渋沢敬三の第一銀行調査部時代に焦点化しつつ、渋沢敬三の実践を広く民間企業における「調査」の系譜に位置付けることを試みる。

いわゆる信用調査を行う民間企業は、渋沢栄一による東京興信所 (1896 年創業) や、帝国興信所 (1900 年創業、現帝国データバンク) などがみられたが、経済・産業等に関する「調査」を生業とする民間企業の実践は、1906 年の野村商店調査部 (現野村総合研究所) の新設にさかのぼることができる。

野村商店につづき、国内銀行においても調査に基づく情報発信の必要性が叫ばれるようになり、1930 年に第一銀行において「調査部」が新設され、渋沢敬三が部長に就任した。渋沢敬三は金融機関や官公庁こそが調査に注力すべきという問題意識を持ち、毎月の『第一銀行経済月報』の発行のほか、諸外国の金融政策動向に関する報告書の発行など、多岐にわたる調査活動を率いていった。渋沢敬三のもとで当時調査部課長を務めていた酒井杏之助 (のちの全国銀行協会連合会会長) は、個別の業界に入り込み、業界動向を逐次調査・発信する、いわばフィールドワーク的な能力が求められるセクターアナリストを重視していた。

渋沢敬三の銀行調査部における実践は、アチック・ミュージアムでの活動とテーマ的には一見かかわりがないように見えるが、社会経済的状況をミクロなデータから丹念に追跡し、それらのデータのアーカイブを意識しつつ、現実の社会変化を捉えようとする点で共通している。このような姿勢は、その後、渋沢敬三の系譜を受け継いだ民俗学者による国内外での調査・コンサルティングへと受け継がれていくことになる。こうした社会実践の系譜は、民俗学が狭義の「民俗」、すなわち文化的な現象のみではなく、広く社会経済的課題に対し実践的に取り組んでいく上で、改めて振り返るべきものであると考えられる。

なお、民間における「調査」実践は、学術論文等と違って担当者の氏名がクレジットされないことが多いため追跡は困難を極めるが、報告書等の成果物は政府や自治体の政策遂行過程に重要な影響を与えている場合もみられる。発表者は、こうしたノンクレジットによる調査実践の学的系譜を追うことで、狭義の「学問史」を越え、後進の社会実践に資する「学史」を構築できるのではないかと構想している。

- 1) 本報告の下敷きになる二つの論考。これまで成果は、ほとんどここで盛り込んでいたので、今回の報告は、その再編集・再整理が中心に、なにかを付けくわえられたらと思う。

「実業：渋沢栄一と渋沢敬三」

(佐藤健二『文化資源学講義』東京大学出版会, 2018:207-232.)

「渋沢敬三における「もうひとつの民俗学」」(『歴史と民俗』30号, 2014:67-97.)

- 2) 民間学としての渋沢敬三の「学問」

鹿野政直(『近代日本の民間学』岩波新書, 1983)が整理した4つの論点。①主題としての「生活」→大学の学問の抽象性・生活からの乖離。②担い手としての「生活者」→研究の担い手と生活の担い手の分裂。③方法としての「帰納法」→事実の観察・記録・測定・博覧の重視。④「日常語」と交流する文体→近代日本語における学術語と日常語の断絶。

- 3) 青淵・栄一の「実業」重視と祭魚洞・敬三における「実物」重視の接続

青淵における武士・官僚の知識重視・精神労働に対する、農工商の実物重視・生産労働。

福沢諭吉の実業論の武士性と渋沢栄一の実業論の農民性：大学生と村人

敬三における「実物」の重視：民具、図彙・絵引、しかしその困難。→「問答」へ

「失敗史」というもうひとつの「実」：現実には存在しなかった知恵にむけて

「合本主義」と「ティーム・ワークのハーモニアス・デベロップメント」

- 4) 「倶楽部」あるいは「社会」としてのアチックミュージアム

幼き日からの「蒐集癖」。アチックの原点。鈴木醇(地質学・鉱物学)、宮本璋(生化学)。

共同調査の試みから学会連合へ：十島村、多島海、石神村……。

「問答」としての調査研究：『民具問答』の苦悩

複数で歩くことと、現地の人びとと歩くこと

- 5) 社会的共通資本としての索引・博物館：実業としての実学

「本もつくったが、人もつくった」(『犬歩当棒録』角川書店, 1962:218)

敬三が重視した「索引(索隠)」集成と「資料集」

本を書かない人たちの本「事実に即した人間の汗の記録」(『祭魚洞襍考』岡書院, 1954:409)

実業史博物館における「第三室：経済招魂室」の構想

- 6) まとめ：実学としての民俗学